



図書館展示 6月●2007年
期間●2007年6月4日～6月30日

現代ヴァイオリン演奏の父 ヨーゼフ・ヨアヒム

Joseph Joachim

没後 100 年



企画●伊藤陽子（国立音楽大学附属図書館データベース開発部）

場所●図書館ブラウジングルーム・AV資料室

現代ヴァイオリン演奏の父

ヨーゼフ・ヨアヒム (1831～1907)

没後 100 年

Joseph Joachim

今年 2007 年は、ヨーゼフ・ヨアヒム没後 100 年にあたります。

現在では、主にベートーヴェン、ブラームス等のヴァイオリン協奏曲カデンツァの作者として知られていますが、19 世紀後半、ヨアヒムはヨーロッパで最も偉大な演奏家（ヴァイオリニスト・指揮者）、作曲家、音楽教育家として、音楽創造に大きな役割を果たしました。

幼い頃から神童ヴァイオリニストの誉れ高かったヨアヒムは、ペスト（現ブダペスト）、ウィーンで学んだ後、ライプツィヒ、ワイマール、ハノーヴァー、ベルリンとドイツ国内を移り住み、作曲に、教育に、活躍の場を拡げていき、晩年さまざまな栄誉に輝きます。彼はブラームスはじめ、メンデルスゾーン、シューマン、リスト、ブルッフ、ドヴォルザーク等多くの音楽家と親交を深め、そこから今日よく知られているたくさんの名曲が生まれました。

今回は、ヨアヒムの生涯とその活躍ぶりを写真でたどり、作曲した楽曲（楽譜）、録音された演奏（CD）を展示するとともに、本や雑誌に残されているヨアヒムの言葉を集めてみました。ヨアヒムがめざした音楽を知る手がかりとなれば幸いです。

目次

ペスト(現ブダペスト) 1833～1839 年	・・・2
ウィーン 1839～1843 年	・・・2
ライプツィヒ 1843～1850 年	・・・3
ロンドン 1844 年～	・・・4
ワイマール 1850～1853 年	・・・5
ハノーヴァー 1853～1868 年	・・・5
ベルリン 1868～1907 年	・・・7
展示資料紹介	・・・9

企画・構成 伊藤陽子（国立音楽大学附属図書館データベース開発部）

ヨアヒムの生家

絵葉書(出典:Beatrix Borchard “Stimme und Geige ; Amalie und Joseph Joachim” p.74)

1831年6月28日、ハンガリー西部キットゼー(現オーストリア)で、父、ユーリウス、母ファニーの7番目の子供として生まれた。

「商人だった父、母はもとより先祖に音楽家はいない。家での音楽と言えば、ギターを伴奏に姉が歌っていたくらいだ」(出典:Musical times v. 39 April 1898. p. 225-230)

ペスト(現ブダペスト) 1833~1839年 3歳~8歳

神童ヨアヒム

写真(出典:Beatrix Borchard “Stimme und Geige ; Amalie und Joseph Joachim” p. 77)

1833年に一家はペストに移った。5歳になった頃、スタニスラフ・セルヴァチンスキー(1781-1850)にヴァイオリンを習いはじめた。

ヨアヒムの上達は目覚しく、1839年3月17日、ペストのアデル・カジノで、はじめて聴衆を前に演奏した。(シューベルトの悲しみのワルツによる変奏曲)を独奏、師のセルヴァチンスキーと、フリードリヒ・エックの(二重協奏曲)を演奏して、当時の雑誌で「第二のヴュータンかパガニーニか、はたまたオーレ・ブルカ」と評された。

(出典:Barret Stoll “Joseph Joachim : violinist, pedagogue, and composer”)

ウィーン 1839~1843年 8歳~11歳

1839年夏、ウィーンに行き、最初はミシュク・ハウザー(1822-1887)、続いてゲオルグ・ヘルメスベルガー(1800-1873)に師事した。ヘルメスベルガーから、ボーイングが良くないので将来は期待できないと言われた。2年後、H.W.エルンストの紹介で、ボーイングのスペシャリスト、ヨゼフ・ベームに師事することになった。

(出典:Barret Stoll “Joseph Joachim : violinist, pedagogue, and composer”)

師ヨゼフ・ベーム(1795-1876)

画(出典:http://www.schillerinstitute.org/fid_91-96/954_beethoven-225.html)

1841年から43年まで、ヨゼフ・ベーム(1795-1876)に師事した。

「私はベームの家に住むことになった。ベームは弦楽四重奏の奏者としても非常に優れていた。小さい頃、四重奏の演奏について実際的な理解を深めることができたのは、実に貴重な経験だった。ベームはウィーン音楽院教授だったので、そこでも学ぶことになった。」(出典:Musical times v. 39 April 1898. p. 225-230)

ライプツィヒ 1843～1850年

11歳～19歳

ヨーゼフ・ヨアヒム 12歳

鉛筆画(出典:Harold C. Schonberg “The Virtuosi” c1985. p.158)

ライプツィヒ音楽院教授、モーリツ・ハウプトマンの夫人による。

ヨアヒム 12歳

写真(出典:Beatrix Borchard “Stimme und Geige ; Amalie und Joseph Joachim” p.85)

1843年、12歳間近のヨアヒムはライプツィヒに赴き、メンデルスゾーンのもとで学ぶことになった。

「メンデルスゾーンは、若き日の私の恩師だ。父親のような愛情を注いでくれた。…いつも、どれくらい勉強が進んだか、師に報告に行ったものだ。」

(出典:Musical times v. 39 April 1898. p. 225-230)

ライプツィヒ音楽院(1843)

リトグラフ 1843年(出典:Wolfgang Schneider “Leipzig : Dokumente und Bilder zur Kulturgeschichte” p.333下)

1843年4月3日、メンデルスゾーンはライプツィヒ音楽院(現メンデルスゾーン・バルトルディ音楽・演劇大学)を創設した。ヨアヒムは入学を目指したが、演奏を聴いたメンデルスゾーンは、その必要はないと言った。そして「フェルディナント・ダーフィットにヴァイオリンの個人レッスンを受け、作曲をハウプトマンに習うように。そうすれば、教養を身につけるのに十分な時間を費やすことができるだろう」と続けた。

メンデルスゾーンの部屋(旧市庁舎内 19世紀前半)

写真(出典:Wolfgang Schneider “Leipzig : Dokumente und Bilder zur Kulturgeschichte” p. 322-323)

1843年8月19日、ド・ベリオのロンドをメンデルスゾーンの伴奏で演奏して、ライプツィヒでのデビューを飾った。

この日は、シューマンの〈アンダンテと変奏曲 作品46〉も初演された。演奏したのはクララ・シューマンとメンデルスゾーンだった。ロベルト・シューマンがじっと自分を見つめていたのを覚えている、とヨアヒムは後に語った。

(出典:Musical times v. 39 April 1898. p. 225-230)

しばらく後の1843年11月16日、ヨアヒムはゲヴァントハウスで演奏会デビューを果たす。演奏したのは、エルンストの〈オテロ・ファンタジー〉。ヨアヒムはメンデルスゾーンの家で行われたプライベート・コンサートに何度も参加した。また、メンデルスゾーンと一緒に各地を演奏して廻り、プラハでベルリオーズに、ウィーンではリストに会うなど、多くの音楽家たちの知己を得た。この時期、ヨアヒムは多くの音楽家と親しくなり、音楽、学問の両方を学び続けた結果、ヴィルトーゾのメンタリティーとは全く対極にある文化的・審美的視野を持つに至った。これが彼の芸術的使命の基礎を作ることになった。

1847年11月4日、メンデルスゾーンが38歳の若さで亡くなった。ヨアヒムはその時の思いを、「この世が終わってしまったようでした」と語っている。メンデルスゾーン亡き後、ヨアヒムは3年間ライプツィヒに留まり、ゲヴァントハウス管弦楽団で演奏し、ライプツィヒ音楽院でヴァイオリンを教えた。

ロンドン 1844年～

フィルハーモニック・ソサエティー演奏会プログラム 1844年5月27日

写真(出典:Musical times v. 40 (1899. July 1) p. 457)

1844年5月27日、ロンドン、フィルハーモニック・ソサエティーの音楽会でベートーヴェンのヴァイオリン協奏曲を演奏(指揮メンデルスゾーン)。写真は演奏会の50数年後、当時のプログラムへのサインを求められ、懐かしんで"little fellow Joseph Joachim"と自ら書き入れたもの。

演奏会では、メンデルスゾーンの〈真夏の夜の夢〉がイギリスで初演された。この演奏会の54年後、当時を思い出してエリザベス・モーンゼー嬢は、リハーサルの様子を次のように語った。「よく覚えていますよ。メンデルスゾーンは明るくとても楽しそうで、若いヨアヒムを深く理解し、共感している感じでした。ヨアヒムは襟を折り返した短いジャケットを着ていました。・・・演奏はとても立派で、態度も思慮深い様子でしたが、そこはやはり少年で、脇のポケットがパンパンに膨らんでいました。いったい何が入っているのだろう、と皆思ったものでした。」

(出典: Musical times v. 39 April 1898. p. 225-230)

ヨアヒムに挨拶するリスト(ロンドン グローヴナー・ギャラリーにて1886年4月)
新聞 The Graphic 1886年4月17日より 木版画

(出典:Ernst Burger "Franz Liszt : a chronicle of his life in pictures and documents" p.193)

ヨアヒムは半世紀年以上にわたってしばしばイギリスを訪れ、イギリス音楽界に深い影響を与えた。

ヨアヒムは、母国語を話すように流暢な英語を話した。これについて質問されたヨアヒムは、次のように答えている。「若い頃、ゲッティンゲン大学で勉強していた時に、特別のコースを履修した。教官はオクスフォード大学の英国人で、英国なまりは彼から受け継いだ。そればかりでなく、英国でかなりの時間を過ごした。四十年以上にもわたり、毎シーズン演奏に出かけている。1844年、メンデルスゾーンが私を初めてロンドンに紹介した時、その靈感に満ちた指揮の下、ベートーヴェンの協奏曲をフィルハーモニック管弦楽団と協演して、あの街とあの言葉に惚れ込んでしまった。この思いは今も変わらない」(出典:アーサー・M・アーベル著「我、汝に為すべきことを教えん」 p.11)

ワイマール 1850～1853年

19歳～22歳

ヨアヒム 17歳

画 Friedrich Preller 1848年(出典: "Letters from and to Joseph Joachim" p. 6後)

1850年末、ヨアヒムはリストに招かれ、ワイマールに移った。オーケストラのコンサートマスターを務めるとともに、室内楽奏者としての活動も始めた。

ワイマールで暮らしはじめて間もなく、ヨアヒム・ラフ(1822-82)、ベルンハルト・コスマン(1822-1910)、ハンス・フォン・ビューロー(1830-1894)等と親しくなり、友人達と弦楽四重奏団を結成してさかんに室内楽を演奏した。

リストと親しかった頃

写真 1853年頃(出典: Ernst Burger "Franz Liszt : a chronicle of his life in pictures and documents" p. 193)

リストは好んでヨアヒムの伴奏を務めた。またヨアヒムの音楽的判断を信頼し、作曲したものをヨアヒムに聴かせた。

ヨアヒムはリストを称賛し、指導を仰いだ。自らの古典への嗜好やメンデルスゾーンの評価をめぐる意見の相違が原因となって、1853年、ワイマールから離れた。意見の相違はあったものの、リストとの個人的関係は良好で、ヨアヒムは(ヴァイオリン協奏曲ト短調 作品3)をリストに献呈した。リストも1853年、(ハンガリー狂詩曲第12番)をヨアヒムに献呈している。

ハノーヴァー 1853～1868年

22歳～37歳

1853年から15年間、ヨアヒムはハノーヴァーで暮らした。演奏家として確固たる地位を築きあげるとともに、作曲家として、教育者としても活動の幅を拡げていった。

クララ・シューマンと共に

Adolf Menzelの画に基づく写真 演奏会 1854年12月20日

(出典: Beatrix Borcard "Stimme und Geige ; Amalie und Joseph Joachim" p.133)

ハノーヴァーではゲオルグ5世の首席ヴァイオリニストを務めた。また指揮者、ソリストとしても広く活躍した。

ヨアヒムは夏のオフシーズンを利用して、ヨーロッパ各地を演奏旅行した。

ヨアヒムは完成した作品を56曲遺しているが、代表作のほとんどがこの時期に作曲されたと言われている。

1853年、シューマンはヨアヒムのために、(ヴァイオリンとオーケストラのためのファンタジー作品131)を作曲した。有名なF.A.E.ソナタはこの時作られた(展示資料紹介p.9参照)。シューマンは(交響曲第4番ニ短調)をヨアヒムに献呈し、ヨアヒムは生涯その自筆譜を大切に持っていた。

ブラームスと共に

(出典: Beatrix Borchard “Stimme und Geige ; Amalie und Joseph Joachim” p.127 (Abb 19))

1853年5月、ヴァイオリニストのレメニーがハノーヴァーで演奏会を開いた時、伴奏したのがまだ19歳のブラームスだった。ヨアヒムはブラームスの真摯な音楽への没入に感銘を受け、ワイマールのリストへ紹介状を書く。ブラームスとの交流は生涯にわたって続いた。

1857年、ブラームスとヨアヒムはリストらの新ドイツ楽派の方針に対して、反対を宣言。

ハノーヴァー時代、ヨアヒムはルター派の洗礼を受けた。

ヨーゼフとアマーリエ・ヴァイス

(出典: Brigitte Massin “Les Joachim : une famille musicians” p. 218 後)

1863年、アマーリエ・ヴァイス(1839 - 1899)と結婚した。

アマーリエ・ヴァイスは有名なオペラ歌手(メゾ・ソプラノ)。ヨアヒムがオペラを指揮したのは、彼女が出演したグルックの〈オルフェオとエウリディーチェ〉だけだと言われている。ヨアヒムと彼女との間には6人の子供が生まれたが、1884年、二人は離婚した。ヨアヒムがアマーリエと出版者フリッツ・ジムロックとの仲を嫉妬し、アマーリエを責めたことが原因とされる。クララ・シューマン、ブラームスの手紙から、この疑惑は事実無根と考えられている。アマーリエは離婚後もリート歌手として活躍し、1890年にはアメリカ合衆国に演奏旅行したが、1899年、ヨアヒムより先に亡くなった。

ヨアヒム記念・ハノーヴァー国際ヴァイオリン・コンクール 1991～

1991年、ヨアヒムを記念して、ハノーヴァー国際ヴァイオリン・コンクールが開催された。3年毎に開催され、ヨーロッパでは評価の高いコンクールとなっている。

ハノーヴァー時代のヨアヒムは、ヴァイオリン教師としての名声が高まった。この時代の最も有名な弟子は、レオポルド・アウアーである。

ヨアヒムは、ユダヤ人、ヤーコブ・グルン(1837 - 1916)の役職をめぐるごたごたが原因で、ハノーヴァーを去ることになった。1866年、プロシャ・オーストリア戦争でゲオルグ5世が失権したことも影響した。



ベルリン 1868 - 1907 年

37 歳 ~ 76 歳

1868 年秋、ベルリンの高等音楽学校(現 ベルリン芸術大学)の校長として招聘され、家族共々ベルリンに移った。37 歳から 76 歳までの 39 年間にベルリンで暮らした。

ベルリン音楽学校初代校長となる

(出典: Beatrix Borchard “Stimme und Geige ; Amalie und Joseph Joachim” 冒頭(Abb 1))

1869 年、初代校長に就任し、1907 年に亡くなるまでその職にあった。

ヨアヒムは、クララ・シューマン、ブラームス、クリサンダー等を教師に招こうと構想したが、叶わなかった。しかし学校運営は成功し、1869 年 9 月開校時に 19 人だった入学者は 3 年後に 100 人を超え、1890 年には 250 人を数えた。その後も学校は発展を遂げ、教授陣にクルト・ザックス、フンパーディンク、ヒンデミット等が加わった。ヨアヒムは、かなりの時間をヴァイオリン・レッスンと室内楽クラスに割いた。学校以外では教えず、有望なものには経済的援助をした。

(出典: Barret Stoll “Joseph Joachim : violinist, pedagogue, and composer”)

ベルリン・フィルハーモニーを財政支援

1882 年、新しいオーケストラがベルリンで結成された。現在のベルリン・フィルである。このオーケストラを強力に支援したヨアヒムは、高等音楽学校と連携をはかることで、財政状態を改善しようと試みた。

同年 12 月、ヨアヒムが大臣あてに出した陳情書には、次のように記されていた。「高等音楽院の定款には、この学校で育成された人材を用いて、演奏会を催すと定められています。この目標達成のためには、...「常設の」オーケストラを設け、その試演や演奏会に優秀な学生が参加できるようにする必要があります。オーケストラを必要とするのは、1 年のうち 10 月 10 日から翌年の 5 月 10 日までの七ヶ月であります。この期間は高等音楽院がこのオーケストラの財政を保障し、それ以外の五ヶ月はオーケストラ自身が自分たちの力で、経費をまかなうようにするべきでしょう。」

(出典: ウェルナー・エールマン著『ベルリン・フィル物語』 p.31-32)

ヨアヒム四重奏団結成

写真 1890 年頃(出典: Brigitte Massin “Les Joachim : une famille musicians” p. 218 後)

1869 年、ヨアヒム弦楽四重奏団を結成した。メンバーは何度か入れ替わったが、その後 40 年近く活動を続けた。

四重奏団は、ドイツ主要都市はもとより、ウィーン、ブダペスト、ロンドンとその周辺、パリ、ローマに赴き、演奏活動を続けた。ドイツ国内では、彼らが出演しない音楽祭は完全と見なされないほどだった。

レパートリーは、ベートーヴェン後期弦楽四重奏曲、ハイドン、モーツァルト、シューベルト、シューマン、メンデルスゾーン、そしてブラームスの作品。ブラームスの作

品の多くは彼らが初演した。ベルリンでのプログラムは多彩で、ドヴォルザーク、ゲーゼ等現代作曲家の作品も演奏した。ケルビーニ、シュポア、ディッターズドルフなど古い作曲家の名前も登場したが、フランス、ベルギー、北欧などからのレパートリーはなかった。「作曲家の意図に敬意を払う」というのが彼らの解釈の特徴とされた。

1905年、ヨアヒム弦楽四重奏団は、ローマでベートーヴェン弦楽四重奏曲の全曲演奏を行っている。(出典：“Grove’s Dictionary of Music and Musicians. 1918ed. v. 2”)

晩年 アーネスト・ネルソン油絵

(出典：Beatrix Borchart “Stimme und Geige ; Amalie und Joseph Joachim” (Abb 61))

ヨアヒムは最晩年まで健康を保ち、亡くなる数ヶ月前まで、演奏活動を続けた。

1889年3月1日、芸術活動50周年を記念して、ベルリン高等音楽学校で胸像の序幕式があり、ヨアヒムの作品が演奏された。

同年4月16日には、ロンドンでストラディヴァリウスとトゥレテの弓を贈られた。

1899年4月22日、ベルリン高等音楽学校で芸術活動60周年記念式典が行われた。ヴァイオリン90人、ヴィオラ30人、チェロ21人、ダブルベース20人による弦楽オーケストラが演奏した。ダブルベース以外はヨアヒムの生徒で、中には白髪混じりの人もいたと言われる。ヨアヒムは二人の女生徒にヴァイオリンと弓を渡され、ベートーヴェンのヴァイオリン協奏曲を演奏して、大きな拍手につつまれた。

1904年、ロンドン・デビュー60周年記念式典は、ロンドン、クイーンホールで行われた。ヨアヒムは自作(ヘンリー四世序曲)を指揮するとともに、再びベートーヴェンのヴァイオリン協奏曲を演奏した。

ヨアヒムは、1907年の5月まで演奏活動を続けていたが、その後体調を崩し、8月15日ベルリンで亡くなった。(出典：Barret Stoll “Joseph Joachim : violinist, pedagogue, and composer”)



出典：“Letters from and to Joseph Joachim”

展示資料

楽譜

Joseph Joachim "Variationen über ein irisches Elfenlied : für Klavier"

Hamburg : J. Schuberth, c1989 請求記号 G22-775

Joseph Joachim "Hebrew melodies : viola & piano, op. 9"

London : Augener, [1948?] 請求記号 H2-269

Joseph Joachim "Hebrew melodies : (on poems of Byron) opus 9, for viola and piano"

New York : International Music, c1994 請求記号 H35-225

Joseph Joachim "Drei Stücke für Violine und Klavier op. 2"

Wiesbaden : Breitkopf & Härtel, c1996 請求記号 H36-519

作曲家としてのヨアヒム

ヨアヒムは完成した作品を 56 点遺しているが、代表作のほとんどはハノーヴァー時代に作曲された。生前出版されたのは 19 曲、そのうちの 14 曲に作品番号が付けられている。シューマンが亡くなる前の最後の仕事は、ヨアヒムの〈序曲 ヘンリー四世〉のピアノ編曲だったと言われる。また、リストはヨアヒムのヴィオラ作品を高く評価していたと言われる。

ヨアヒムが自分の作曲についてブラームスに意見を求めた際、ブラームスは次のように答えている。「だが、ヨーゼフ、君のこれまでの問題点を一つ指摘できる。『公的な職務や名誉職があまりにも多過ぎる』ベルリン王立高等学校長の上に、…。この種のことが皆作曲を妨げる。価値ある音楽を書きたいと望む作曲家は、すべての時間とエネルギーを、この仕事のために捧げねばならない。ヨーゼフ、君みたいにひっきりなしに電話がかかってくるなら、聴くに値する何ものも生み出すことはできない」(出典:アーサー・M・アーベル著『我、汝に為すべきことを教えん』 p.94)

Joseph Joachim, Andreas Moser "Violinschule"

London : N. Simrock, c1956-59 請求記号 H20-621/(II-2)

ヨアヒムと弟子のモーザーが編纂したヴァイオリン教本。3 巻本で、1 - 2 巻は、モーザー、ヨアヒム他による練習曲。3 巻は重要曲 16 曲の解釈が載っている。各曲の前に二人のいずれかが書いた解説が付けられている。

"Johannes Brahms und seine Freunde = Johannes Brahms and his friends : für Klavier"

Wiesbaden : Breitkopf & Härtel, c1983 請求記号 G18-713

Johannes Brahms, Albert Dietrich, Robert Schumann.

"F. A. E. : Sonate für Violine und Pianoforte"

Amsterdam : Heinrichshofen : sole selling agents, C.F. Peters, c1953 請求記号 H0-669

1853 年、シューマンが〈ヴァイオリンとオーケストラのためのファンタジー 作品 131〉をヨアヒムに献呈した。初演後、サプライズパーティーが企画され、その場で F.A.E.ソナタの手稿譜が贈られた。それぞれの楽章を、ブラームス、ディートリヒ、シューマンが作曲して、モチーフは、F.A.E.。その頃のヨアヒムのモットーであった〈Frei, aber einsam 自由に しかし 孤独に〉に基づく。クララ・シューマンのピアノ、ヨアヒムのヴァイオリンで演奏され、ヨアヒムは直ちに作曲者を当てた。1906 年まで、楽譜はヨアヒムの手元にあった。ヨアヒムは、ブラームスのスケルツォの部分だけが出版に値すると判断していた。曲全体が出版されたのは 1935 年。

Johannes Brahms "Concerto for violin, op. 77"

Washington : Library of Congress, 1979 請求記号 H18-666f

1878年7月に書き始め、8月21日には第1楽章の独奏ヴァイオリンパートをヨアヒムに送って、批評を求めている。この自筆譜にもヨアヒムは力を込めた筆致で書き込みを入れている。1879年1月1日ライブツィヒで初演(ヨアヒム独奏、ブラームス指揮)。(当館発行『ばるらんど』255号p.2-4参照)

Max Bruch "First violin concerto ; and, Scottish fantasy"

New York : Dover, 1994 請求記号 H40-229

この曲は1868年に完成し、同年4月ブルッフの指揮で初演された。この演奏に満足できなかったブルッフはヨアヒムに意見を求めた。ヨアヒムは長い手紙を書いてこれに答えている。改訂後の1867年10月、この曲はヨアヒム独奏で再演され、翌68年出版に際して、ヨアヒムに献呈された。(当館発行『ばるらんど』255号p.2-4参照)

Robert Schumann "Konzert für Violine mit Begleitung des Orchesters, d moll"

Mainz : B. Schott's Söhne ; New York : Associated Music Publishers, c1937 請求記号 H1-540

本来ならば1853年にヨアヒム独奏、シューマン指揮で初演されるはずだったが、実現しなかった。シューマンの死後、自筆譜はヨアヒムが預かり、ヨアヒム死後は、長い間プロイセン国立図書館に保管されることになった。ヨアヒムの遺言には「この協奏曲は作曲家の死後、100年を経てはじめて上演を許可する」と書かれていた。実際は、作曲されてから84年後の1937年11月26日、初演された。(当館発行『ばるらんど』255号p.2-4参照)

Johannes Brahms "Hymne zur Verherrlichung des grossen Joachim"

Hamburg : J. Schuberth, [c1976] 請求記号 H19-076

ある日、若い音楽仲間でヨアヒムをからかおうという話になり、ヨアヒムに特別の栄誉を授けることで話がまとまった。7月のある日を、ヨアヒム22歳の誕生日だと宣言し、この日のためにブラームスが何か作曲することになった。タイトルは「偉大なるヨアヒムを称える讃歌」。楽譜の表紙に書かれている崇拜者、Giuseppe, Ottone, ArnoldinoはそれぞれJohannes Brahms, Otto Brinkmann, Arnold Wehnerのこと。3人は手近にあったヴァイオリン2挺、コントラバスを取って弾き始めた。もちろんそれぞれが一番下手な楽器を演奏した。こうしてささやかな誕生パーティーははじまった。(出典:楽譜序文)

この楽譜はブラームス自筆譜ファクシミリ。

なおこの曲は、スピヴァコフ演奏のCDがあるが、当館未所蔵。

Ludwig van Beethoven "Konzert in D dur für Violine und Orchester"

London : Simrock, c1905 請求記号 H0-569

この曲は1806年ウィーンで初演されて以来、40年近くの間、数えるほどしか演奏されなかった。1844年5月27日、ロンドンでの演奏(ヨアヒム独奏、メンデルスゾーン指揮)により復活したと言われる。ヨアヒムはこの曲を終生演奏し続けた。(当館発行『ばるらんど』255号p.2-4参照)

貴重楽譜 初版

Ludwig van Beethoven "Concerto pour le violon...oeuvre 61"

Wien : Riedl, [ca. 1815] 請求記号 M2256

Brahms ; violino & piano : Jos. Joachim "Ungarische Tanze Nr. 5 & 6"

Hamburg : N. Simrock, [19--] 請求記号 H0-671

ヨアヒムは、編曲も手がけた。有名なものは、ブラームスの〈ハンガリー舞曲全21曲〉のヴァイオリン・ピアノ編曲である。ブラームスはこの編曲を熱狂的に歓迎したと言われる。ヨアヒムの編曲としてはこ

の曲の他に、シューマンに薦められて行ったシューベルトの(ピアノ連弾・ソナタ D. 812)の管弦楽編曲が有名である。

Joseph Joachim "Kadenzen zu Violinkonzerten : [von Viotti, Mozart, Beethoven und Brahms]"

Leipzig : Edition Peters, c1968 請求記号 H13-459

ヨアヒムの作曲したカデンツァ集。ベートーヴェン、ブラームスの他に、ヴィオッティの協奏曲 22番、モーツァルトの協奏曲 K. 218、K.219 のカデンツァを収載している。

貴重楽譜 ブラームスは作品1をヨアヒムに献呈

1853年10月17日の手紙でブラームスがヨアヒムに作曲を見せ始めていることがわかる。この時満足していると書いた(トリオ 作品4)を、後に(ピアノソナタ 八長調 作品1)として出版した。その際、最初の激励の言葉を寄せてくれた偉大な芸術家、ヨアヒムに献呈した。

Johannes Brahms

"Sonate (C dur) für das Pianoforte componirt und Joseph Joachim zugeeignet...Op. 1"

Leipzig : Breitkopf & Härtel, [1853] 初版 請求記号 Mf2837

図書

佐藤謙三著『近世バイオリン演奏史：パガニーニよりヨアヒムまで』

東京：京文社, 1927 請求記号 C27-100

「本邦ヴァイオリン家中の第一流の名手である現東京音楽学校教授安藤幸子氏は今世紀の初め - - たしか明治三十四年から三十七年[1901-1904] - - ベルリンの音楽学校で有名なヨアヒム教授の厳格なる薫陶を受けられ、その優れた才能は当時のベルリン同窓の驚異となって居た事は、編者のこの研究の材料となった「ヴァイオリン演奏の歴史」の著者モーザーが、その生前よく人に語った所である。」 p.18より引用

ヨアヒム・ハルトナック著；松本道介訳『二十世紀の名ヴァイオリニスト』

白水社, 1971 請求記号 C12-430

ハラルド・エッグブレヒト著；シュヴァルツァー節子訳『ヴァイオリンの巨匠たち』

東京：アルファベータ, 2004 請求記号 J101-160

Beatrix Borchard

"Stimme und Geige : Amalie und Joseph Joachim : Biographie und Interpretationsgeschichte"

Wien : Böhlau, c2005 請求記号 J105-933

アマーリエ・ヨアヒムとヨーゼフ・ヨアヒムに関する最新の研究書。CD-ROM 付き。

Brigitte Massin "Les Joachim : une famille de musiciens"

[Paris] : Fayard, c1999 請求記号 J97-901

Andreas Moser. "Johannes Brahms im Briefwechsel mit Joseph Joachim"

Berlin : Deutsche Brahms-Gesellschaft m.b.H, 1908 請求記号 C3-737/(1),C3-738/(2)

Nora Bickley "Letters from and to Joseph Joachim."

New York : Vienna House, 1972 [c1914] 請求記号 C39-612

雑誌

『Musical times』 Joachim 特集

請求記号 P330 v.39

雑誌 ミュージカル・タイムス ヨアヒム特集 v. 39 (1898年4月1日) p. 225-230

「現存する最も偉大なヴァイオリニスト、ヨーゼフ・ヨアヒムがミュージカル・タイムス読者に語る自らの人生と音楽」

録音資料

【作曲】

Joseph Joachim / Violin concerto no. 3 in G major ; Overture "Hamlet", op. 4 ; Overture "In memoriam Heinrich von Kleist", op. 13

Takako Nishizaki, violin ; Stuttgart Radio Symphony Orchestra ; Meir Minsky, conductor

1983年録音 請求記号 XD17861

Joseph Joachim / Hebraische Melodie : op. 9. Nr. 2

Eberhard Klemmstein, viola ; Dorian Keilhack, piano 1993年録音 請求記号 XD33727

Joseph Joachim / Violin concerto no. 2 in D minor, op. 11 "Hungarian"

Aaron Rosand, violin ; Orchestra of Radio Luxembourg ; Louis de Froment, conductor 請求記号 XD33771

Joseph Joachim / Romanze

神谷美千子(ヴァイオリン)、イアン・ブラウン(ピアノ) 1998年録音 請求記号 XD41665-41666

Bach / Sonata no. 1, BWV 1001. Prelude ; Partita no. 1, BWV 1002. Bouree ; Joachim / Romance in C ; Brahms, arr. Joachim / Hungarian dances nos. 1 and 2

Joseph Joachim(violin) 1900-1913年録音 請求記号 XD53379-53380

【編曲】

シューマン(編曲:ヨアヒム) / 「夕べの歌」作品 85 の 12

ハインツ・ホリガー(オーボエ)、アルフレッド・ブレンデル(ピアノ) 1979年録音 請求記号 XD1597

Brahms(編曲:ヨアヒム) / Hungarian dance no. 1

Joshua Bell, violin ; Samuel Sanders, piano 1986年録音 請求記号 XD23538

Brahms-Joachim / 21 Hungarian dances

Aaron Rosand, violin ; Hugh Sung, piano 1991年録音 請求記号 XD37562

【カデンツァ】

Mozart(カデンツァ:ヨアヒム) / Violin concerto in A, K. 219

Arthur Grumiaux, violin ; London Symphony Orchestra ; Sir Colin Davis, conductor

1961年録音 請求記号 XD30477

Wolfgang Amadeus Mozart(カデンツァ:ヨアヒム) / Violin concertos

Pamela Frank, violin ; Tonhalle Orchester Zurich ; David Zinman, conductor

1997年録音 請求記号 XD43337-43338

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン(カデンツァ:ヨアヒム) / ヴァイオリン協奏曲ニ長調作品 61
Ida Haendel, violin ; Philharmonia Orchestra ; Rafael Kubelik, conductor 1949年録音 請求記号 XD43802

Johannes Brahms(カデンツァ:ヨアヒム) / Violin concerto in D, op. 77
Arthur Grumiaux, violin ; Royal Concertgebouw Orchestra, Amsterdam ; Eduard van Beinum, conductors
1958年録音 請求記号 XD30480

【交友関係】

(当館発行『ばるらんど』255号p.2-4参照)

Schumann / Violin concertos

Thomas Zehetmair, violin ; Philharmonia Orchestra, Christoph Eschenbach, conductor
1988年録音 請求記号 XD53920

Antonin Dvorak / Concerto for violin and orchestra in A minor, op. 53

五嶋みどり(ヴァイオリン)、ズーピン・メータ指揮、ニューヨーク・フィルハーモニック

1989年録音 請求記号 XD8851

【演奏】

Brahms ; arr. Joachim / Hungarian dance no. 2 : in D minor

Josef Joachim, violin 1902-1922年録音 請求記号 XD44750

Brahms / Hungarian dance no. 1 ; Bach / Prelude in G minor

Joseph Joachim(violin) 1903-1916年録音 請求記号 XD12604

Bach / Partita no. 1, BWV 1002: Bourree ; Brahms / Hungarian dance no. 2 in D minor

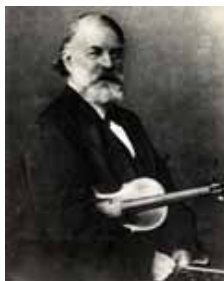
Joseph Joachim(violin) 1902-1928年録音 請求記号 XD15808-15810

ヨアヒムとバッハ

ヨアヒムが生涯で最も回数多く演奏したのは、バッハの〈シャコンヌ 二短調〉と言われている。

バッハの〈無伴奏ソナタとパルティータ〉は、作曲されて以来、長い間ヴァイオリンをマスターするための最高の曲と考えられてきたが、演奏会で演奏されることはなかった。ヨアヒムは、この独奏曲を重要な演奏会レパートリーとした最初のヴァイオリニストであり、またここから2つの楽章(ト短調ソナタからアダージオと変ロ短調パルティータからブーレ)を蝋管に刻んで、世界で最初に録音した。

最近の研究で、1908年に出版されたヨアヒム校訂版が、バッハの自筆譜に基づく最初の版であるということが明らかになった。(出典:Joel Lester "Bach's work for solo violin")



出典: "Letters from and to Joseph Joachim"

展示資料および出典とした資料は当館で所蔵しています。ただし下記資料は東京藝術大学附属図書館よりお借りしました。記してお礼申し上げます。(Barret Stoll Joseph Joachim : violinist, pedagogue, and composer.)

図書館展示 6月 2007

現代ヴァイオリン演奏の父
ヨーゼフ・ヨアヒム (1831 ~ 1907)
没後 100 年

Joseph Joachim



出典: Beatrix Borchard
“Stimme und Geige ;
Amalie und Joseph Joachim”

展示パンフレットは図書館ホームページからも入手できます。(バックナンバーも公開しています。)

<http://www.lib.kunitachi.ac.jp/tenji/tenji.htm>

2007.6.8 編集 国立音楽大学附属図書館広報委員会:高田涼子・三宅巖